

ガタリと 68 年 5 月

文責：横田

世界市場は矛盾をはらんでいるが、帝国主義相互間はもちろん、現存の社会主義諸国家も資本主義的生産の社会的諸関係から脱却できない。この諸関係を変えるためには中心を持たないという、新しいやり方の大衆闘争組織が必要だ。というのも、労働者運動は普遍性を持ったものであるが、共産党のような中央集権的なやり方では行き詰まってしまうからだ。*《左翼反対派の九つのテーゼ》に関する記述を要約

と考えるガタリは、空間的な多極化をもとに動的に編成された、従来とは異なる主体性の形態をかねてから願望していた。彼は自然発生的に起きた5月革命のなかに、とりわけ漸進的な創造性をもつ三月二十二日運動のグループに理想を見出す。

「三月二十二日運動がすばらしいのは、(中略)このグループが、学生や青年労働者の巨大な層の《分析装置》として成立しえたということである」

4月にナントールに赴いてこのことを悟ったガタリはラボルドに戻り、部隊に招集をかけた。ラボルドの医師、指導員、研修生、患者をはじめとして、FGERIの様々なネットワークの活動家たちが動員された。ラボルド精神病院は68年5月の渦中に入り込み、異議申し立ての的になったラボルドの長ジャン・ウリはガタリたちを非難。2人の共生に終止符がうたれた。

この運動から「ラボルドで何をしているのか？狂気は政治的現象か？どうして精神医学があるのか？病者の権利と権力って何？治癒するってどういうこと？」という問題が出現。

ガタリと彼のラボルドの部隊は加入戦術で多数の小さなアソシエーション、女性運動、文化運動、映画愛好会などをコントロールすることに成功した。こうして墮胎の権利への運動、女性解放闘争、医師の運動などが活発化した。

5月革命では学生と労働者の世界の境界が断ち切れ、大きな価値観の変化に繋がった。なお、ガタリはこの運動のなかでもとりわけ、フランとソショーにおいてグルネル協定という妥協を真正面から打破しようとしたラディカルな衝突を高く評価している。

ドゥルーズと 68 年 5 月

ドゥルーズは革命的活動家ではなかったが、リヨン大学で教鞭をとっていた彼は学生の異議申し立てに公式の支持声明を出し、リヨンの大学生の全体集会やデモに全身で参加した。(＊リヨンの教員のなかでも大変少数派)

夏は基本的に学位論文に集中。その後結核の手術で肺を失い、1年の術後休養をとる。このときにガタリと出会う。

ガタリの活動と1968年前後の社会

1965年：ガタリ、FEGRI と左翼反対派をほぼ同時創設。

ミュイヤールの紹介でジャン＝ジャック・ルベルと出会う。

1966年：《左翼反対派の九つのテーゼ》を刊行。

1967年：フィデル・カストロ、チェ・ゲバラ、ボリビアでのゲリラ戦などが出現した頃。
ガタリ、友人たちとラテンアメリカ革命連帯機構(OSARLA)を創設。
アメリカからやってきた共同体主義がフランスの反体制的青年層のなかに広がる。
CERFI は《言表行為の集合的な動的編成》から or 空間的な多極化をもとにした
新たな《集合的主観性》からの、従来とは異なる主体性の形態の出現を待望。

(p104 参照)

1968年3月：ナンテールでの三月二十二日運動

4月：ガタリ、ナンテールへ移動。

パリからラボルドに戻り、部隊を招集。パリでの革命の隊列を強化。

5月：10日、バリケードの夜（→給与生活者たちが異議申し立て運動に合流）

13日、三月二十二日運動による大デモンストレーション

15日、ルベルによるオデオン座の占拠を支援。

↑ *文化大臣が常連→共和国の公式文化を体現するから

?日、FGERI の教員たち主動でユルム街の国立教育センター占拠闘争。

↑ *教育問題から

?日、イスパノ・グループが表舞台に。フランス共産党(PCF)や労働総同盟(CGT)の官僚機構の序列体制をゆさぶる。

17日前後～、フラン＝シュル＝セ＝ヌ所在のルノー(フランスのトヨタ的会社?) の工場の労働者たちがストに入る。

27日、権力と PCF や CGT との妥協の協定である、グルネル協定が結ばれる。

5月終盤、シャンゼリゼーでドゴール主義者の大デモンストレーション

6月：6日、グルネル協定後もストが続いていたフランの工場を共和国保安機動隊(CRS)と機動憲兵隊が襲撃&閉鎖→数人の労働者がパリに協力要請。

7日、フランの工場に大々的動員令。パリの活動家たち(含むガタリ)はフランへ。
→警察の検問、衝突。死者1名でこれが5月革命では初。

11日、ソショー(地名)で占拠されていた工場に警察が武力介入。死者2名。

その他の活動：時期不明

上から省いたガタリと5月革命関連の記述

街頭闘争(=身体的解決)には恐れを感じるタイプだが、みんなが話しだしたということに引かれる。

広がってゆく異議申し立てに、自らが左翼反対派のテーゼ以来あたためてきた革命的展望が、唯一官僚機構を回避しうる社会闘争の先兵としての学生運動の方向に移動する姿を目的のあたりにする。(p.188)

左翼反対派の九つのテーゼ

1965年のクリスマスに完成、66年2月にパンフレットとして刊行

- 1；従来のナショナルな枠組みを超えた分析を採用し、一挙に世界的次元に身をおいて、世界化された論理と国家独占資本主義の特殊利害とのあいだに挟まれた資本主義固有の新たな矛盾を、より鮮明にしようとする。
- 2；労働者運動を資本主義の論理のなかに統合しようとするスターリン主義的・修正主義的な企てを告発する。
- 3 & 4；帝国主義相互間の矛盾と、第三世界の新たな勢力の出現を分析し、労働者運動の国際主義的な次元を明確にしようとする。
＝「階級闘争はその普遍性を特徴とする」
- 5；世界市場の規範から脱出できない現存社会主義諸国家を正面から批判
- 6 & 7；1960年代半ば(つまり当時)のフランスの状況を、主に経済的・政治的世界化(グローバル化)の必然性と国家との関係という角度から概観。
- 8 & 9；革命組織とその再編の行程をどう構築するかという問題を提起。
資本主義的生産の社会的諸関係を変えるために新たな政治的組織の創設が必要だが、共産党の採択する中央集権主義は行き詰まっている→大衆闘争の方針を、そのさまざまな部門の次元に実質的に非中央集権化する必要がある。
* このことは党の指導的役割を否定することではない。
新しい党を創設すべきか否かと問題提起。
(p102 参照)

68年5月のラボラルド

占拠を実行したり医療物資や食料を確保して補給を行ったりするために、医師や指導員たちはたびたびパリに赴き病院を留守にした。入院患者たちは彼らの代わりに病院の物質的な次元の仕事により深く関与し、首都との連絡確保の役割を担った研修生たちは正午にならないとラボルドに姿を現さなかった。ラボルド精神病院は制度そのものを打倒の対象とする反精神医学の方向へと向かった。《ソローニュのサントロペ》との告発を受けたラボルドの長、ジャン・ウリはガタリたちをたたき出した。